



御  
公  
嫌  
物

伊地知文庫  
文庫20  
144









文庫20  
144



高山民部入道宗砌法師

伊地知氏書冊

連歌雑物



衣子か竹田に、西海まであるん

月と妻とい七勺さく人

同多まう急物つらひうこ成毛純

うら山のあやて又魚くくて

連懐哉神祇尺教意無くやう



又の中をいつく處そそよ  
 三舞ふ物もあり物えひきもれ  
 さうて公家本の中とこしきけ  
 日ちこころ八月をよしあきと逢  
 行母草木ハかこりさるやし  
 くも海母ハをう嬉ふさるハ又  
 霞母か月ろ有る月の月

客 さまハすありのとも残せくらん  
 うま子法しきもいそ白人哉  
 後さきれをそ一ちり恋の世や  
 代ら母かき秘て平世名乃在も  
 開花とこも残久よ日方志花  
 さこころも一本名ハ二本なり  
 おろ海しき鬼式女式とわたり



Handwritten notes in a cursive script, likely a shorthand or shorthand system, consisting of several lines of text.

Handwritten text in a cursive script, possibly a signature or a specific name, written vertically.

Handwritten text in a cursive script, possibly a signature or a specific name, written vertically.



千句の中毛ひとつとらきく

嬉しく阿し只一交子かきれを

一の物語

山の名うらまへやえい

秋を丹付ぬかりらぬき

有拍三三三

あめをいしくむむむ

あ〜〜〜きう急木も交子入ぬきハ

春の新葉も春の志う〜の

梨子流るれ梅散流りけらう

さ〜〜花う〜てまよあ〜〜や

春風まじりもあら枝の松〜

木のまじりともう急物の年

をきこみちあつきを嬉ふ物う〜

お歌

う記子流るれをい〜〜付〜き

春のめし志そのやめまじり〜







こゝろの人のかたきこゝろ  
増ふと六梅うぬ及元淳志のつそ  
涙をちうけり梅の一了ん  
す梅一まをそ庶れを了るる魚の  
ゆふへのの梅く人の明くをと  
あそ成とあ流をそ衣敷うろも  
いのちれまゆをそ成きぬ

うつり書れまそハ神のか抗も  
いつまもお明一梅ふちりたり  
そちの中神くまそあそつれを  
そちのつ然もそれ外たり  
隠れやとん代所れそ住家やも  
すぬ居も居あも二句梅ふ也  
水尾床里門窓まむろの産



庭を産海をも<sup>祈</sup>ていとすれ<sup>祈</sup>を  
名代少もかきつも隣もつ魚すそを  
かつもお明一祈とてそまけ  
以筆式花お<sup>か</sup>や屋上のあわとさ  
名一山の間も祈あり  
枳屋階の松木も用るれを  
すこれ<sup>か</sup>ありも用とてれま

地  
母  
山  
石

海式浦入江みると此松志す  
汀も奥も碇もぬいなり  
うき木も糸か<sup>か</sup>る<sup>か</sup>子も水  
阿<sup>か</sup>も<sup>か</sup>持<sup>か</sup>用<sup>か</sup>の<sup>か</sup>年  
父母の<sup>か</sup>名<sup>か</sup>を<sup>か</sup>流<sup>か</sup>う<sup>か</sup>れ<sup>か</sup>と<sup>か</sup>人  
せ<sup>か</sup>れ<sup>か</sup>ち<sup>か</sup>ま<sup>か</sup>も<sup>か</sup>人<sup>か</sup>ま<sup>か</sup>ん<sup>か</sup>そ<sup>か</sup>う<sup>か</sup>  
一とよみ菜山あき思法し



考きつはふことらりつ那  
の記つらあひは法をめが不  
野時多一ちりりきりり  
女帛を帛やむつら雲を  
ちく日くしを記とらぬ  
屋うやと鬼や女の百奇や  
子白中一母一とらうきく

返らもあふ布浮くを  
あまも増も并用此  
うたむの歌よく記も付  
やもく記も増あちり  
珠をらつを又さうたひ  
まこく記も増あちり  
槿代歌をくこま若をう



清くめ良を尾もふせしんをい  
小多うこそこいおも強ふ物ちまひ  
日とらよ一ハお眼一しり  
清りたるうこつ残あこじろあ残ふ  
かきいしもお眼一解用此外

専ら法眼と詞林と事

連歌之事いふうは枕長あふ今此と  
所たつ移よりりて悪念残もつてお  
よふお残何〜中入り先幼々時  
いつあも勺をわらう〜とあそを〜残を  
空と人いあ〜と記る母むち残うちあ  
てき〜て何時もむちりとりあえを  
おへきやうよふ残をらてこき産を



ちとつひちちうくあるくハ

一初心之時に此書なをめされくお月

め一筆一守一のぬくく一我因字

もろく産御もく一おも一法

ままはなしたあゆまのあま

教らぬ方めてさふれあふ満つ我せん

とおもくくくく一あま

あしつあもやまをまはをヤル連歌を

きこるる禮い法くさくむと云

以道も志くぬ聖くく子日の暮るく

をうれ白まそ又連歌あがりて一と

あそく一あくおほく一と

安寂子ハい法くさく人

けくくもきくぬあはく一あ行て



あまのこゝろをめぐりし〜く歩へりことに  
あまのこゝろをめぐりし〜く歩へりことに  
あまのこゝろをめぐりし〜く歩へりことに  
あまのこゝろをめぐりし〜く歩へりことに  
あまのこゝろをめぐりし〜く歩へりことに  
あまのこゝろをめぐりし〜く歩へりことに  
あまのこゝろをめぐりし〜く歩へりことに  
あまのこゝろをめぐりし〜く歩へりことに  
あまのこゝろをめぐりし〜く歩へりことに  
あまのこゝろをめぐりし〜く歩へりことに

いほのかさつりのあまの海〜此のまゝ  
山もなほ残るに世のちかき心地  
さしと出付る〜ささき〜あまの海  
此かきり〜るに心もかきり〜あまの海  
く安ら〜あまの海  
あまの海〜あまの海  
あまの海〜あまの海  
あまの海〜あまの海



	校訂本記載順序	岩瀬本	木田本 (若草山合冊)	平松本 (遠近合冊)	木田本 (若草山合冊)	内周本	斑山本	伊地知本		任一本
1	前句同意の事	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	依人過分の連歌事	2	2	2	2	2	2	3 合	2	2
3	述懐連歌背本意事	3	3	3	3	3	3			3
4	恋連歌背本意事	4	4	4	4	4	4			4
5	依人不似合連歌	5	5	6	5	5	5 合	5		5
6	依人身賤事	6	6 合	5	6	6	●	6		6
7	連歌一句内ニ心有事	7 合		7	7	7		7 合		7
8	角の詞と古事		8	8	8	8	8			8
9	年始連歌の事	9 合	9 合	9	9	9	9	9 合		9
10	折斎連歌の事			10	10	10	10			10
	(註) 何々々合とは大概その個々の一半と脱して又のまゝに附けて別に項目と立てた場合が多い。									

宮内省

十號野紙



とよみさるる心みづちひてあ〜〜〜く  
うき〜〜〜くおち〜〜〜

一連款志清あめよハ種々古〜〜〜く阿  
〜〜〜く 細口ハ古事をとらりおんをい  
〜〜〜に自然人志清うみつりおし  
〜〜〜ん時をさやうめさいつくみそ清  
付ら〜〜〜又古事〜〜〜を付た〜〜〜か

く〜〜〜事をも〜〜〜んの〜〜〜りよハ純  
一おもての事〜〜〜る〜〜〜ハ古事〜〜〜付  
付〜〜〜人。取  
付〜〜〜ハ  
付〜〜〜ハ  
付〜〜〜ハ

れ母〜〜〜いハ但安句保也三を  
とよみさるる此事をも清子伊賀局て  
の連名よ森と云句よ本〜〜〜しと付  
〜〜〜と付又之状と云句よかろ〜〜〜と  
付おと付ら〜〜〜は二句をある〜〜〜名



取よりりいふて宗廟の時小程此と云取  
今合丹十八日丹きいひい事いなる

一 氣を流ると申す事いあききてり

海にて我はつかちる神して柱を

丹よりかくりくるあせいみくらうい

多とくを連放のおもむきよくい思

とも初心を保あせいよてあそい

りい熱いてを美よきなる

一 飯の事い丹をよて事い間

さやうの時さちうおよんを飯をす

るのうそのそを控はす時此丹産の神天

座とてん法くろいすゆくのきやうよ

りへて丹産丹おきく多保飯のいと

てれりい法くたくみくる飯のハ



たのうらんしるる心をもつてそを此を  
ゆちくけ又子句と此後句は何とて  
おまじあをを一何んしてそのかやを  
そをす人天よえ悟してその何と  
うやうたりと一とあるあを句するる  
后極るの海もあを句はぬ程と心さ  
てきそてあはれ連を毛せらう連ぬる

是一志ころつて

一毎交中そのおまはまりとて連珠の事  
さやうの時と日る記句も人も人先おも  
てお一白あそつてりて者連をを何ん  
し何ひよこさ続つて一あかてをば  
海も毎交しさやうのあやゆらん  
おんよかやとれらん



一未産の人の進言の執筆をきくをてぬ  
 さうにいつかすんころきこひうらゝ又録  
 言教母のうら毛をくくくくく  
 よに程丹出をううううう  
 一速懐志の進言の肖述懐事  
 一忘れ進言の肖述懐事

一連款一句み心二る事  
 一年始の進言の事  
 一母のたるお懐事との事  
 一本款母より力をいれようす事  
 一前句同意と中へ

おもやぬかゝまらゝはなまらさ  
 山風や枝も身をを送るゝむ







冬こそ山の峯此う記しを寒きこころ  
よそへもゆくゆめを秋ハさくさくよう記  
ゆづりものつらき事一もあつり  
冬乃峯の庭冬う記しをさむき  
ハあまのこころ

雪は色あせ海をこころんて今

去るこころの行志浪此う記しをさむき

と舟

も雪の文も舟志るきこころんて今

ろくろのちこころんて今

一人あまのこころの連歌

大肉は雲井の月をとらる光あそ

る母ハ秋出幸此見ち海川りて

さうれ白たよりくおろし事ちん

大肉は雲井此月をとらる光あそ

舟人の文も舟志るきこころんて今  
と舟  
又この白と黒



しつ只己の御幸此乃をあらきこて  
ちしつ入るるうーくまー又

とりこちこえむ志きー海の道

是ハまんーしつる神比見しつ

とすーや人丹志きー海比乃

るしつハあさうーく

一速懐のまなぶ速懐事

身ハきてしつ浮世は誰のこころむ

むしつる人のさつうーうろく世

しつう おんるる丹毛をうかるしを

かやうよあまーしつ我の身をなや

きくしつてうにむよふれうのこ

深うむと云ふあまをそまんの心

らうしつ母速懐の心よあうに外



又我身をそとにも を ころす人 を えんて  
い阿ふれむ心ある人 を くれを述懐  
本心をもてしは情のりなり  
志 本心 本多とて 中 中

一恋のま教 恋 恋の背 本 本を

つら〜に と といは は け の 人 の つら は き を  
我 と や 人 志 お り い つ つ 々 む  
思 ぬ つ と 別 は 人 の や ま り い て

これら を みる 恋 恋 の 心 の 心  
さ と や こ と り ぬ う 々 こ の れ を か る  
し こ ま ら ず 母 母 お り 記 を あ り い 名  
母 あ り を い る こ いろ く 小  
心 を 法 ら ず と 志 を あ り と ハ  
中 は 我 身 人 母 あ り れ の か る る  
何 心 恋 の 心 志 母 あ り の い と 飲



一人丹似あ己ぬま欵

（本家）

うづれあ残一叔の家此昇まそ  
かりこむ。理此名の公毛くすし  
いもかりきり道いそくさり  
かやうの句さうふお家の並欵に  
みあつす。又数人並あふり  
い丹し一の者なきのそ利ありそ

叔事此福さあ丹昔恋しし毛

かやうの句と毛はく丹ふ似合ら  
一並欵丹よそ牙をいや志うする

新とりてり牙成すくし望は  
毛し月くそり牙成るくなる  
丹事結とそ毛我丹此あめし田  
かやうの句とまらりし何いのなれそ



新さうの力やううーかきせ  
毛ー河をくくくー片あま  
志佐のめ、我為此あめは田をりて  
めは久そ志うの無くく飲  
一連飲一句丹心二ち承事

風刃丹志うそ新と承人

のせ丹丹志うそとハ我云あめは初り

新本とらう人そよう見うる初り

風刃丹志うそ新とらうんち

うーくうへそ新の細

河しと屋建ぬ阿あ人の袖

乞もかーもやー新とハ我いん

あま人の袖とハ我

より見うる初りうそと志う



これもお心二（四ノ五）うらむきこり

一すみの祠と中事

あしてけ開の山を神さて

この向を開の山風丹神さてと何

つらんわくのししくうをみをおまり

うかよく

残てけ開の山風袖さて

とりへをきさ細く

一年始をせしあえり

祝言をともて本とすうのうらむ

美人か人をとれせ教は祝言

とおお月うらむんを記せ教をあえ

うらむ

一祈接のせ教のうらむ会合の時存知



其人其人の心屋其心は奥に此  
子細に此の心ありてさやうの  
ことありて或る人志や或る  
人志丹法なる人志の建教  
出来たる心丹ある事一はさく  
く此の心あるなりし

一教句切字十八之文

心 たり 此の心 らむ

志 ぞ 加よ せ

や 法 建 ぬす

り 屋 丹 志

一つ家 たり

れそくきうてん法其心の夕の心

一あり



神在月のみちをまをさるあり  
一そつふ

菊をあり梅丹煉花をのり

一らん

風よりもの日教にちんむのま

花おらん朝や夜うつをかん見ま

一志

去あゆみ 朝母まはく秋志ま

一そ

るそ花ふれを咲るるをん梅

一か

秋そめ 露の木は葉の朝る

一よ

消くれよきて了そ阿花此源をる

一や



お路や多花の濃ぬまはれは月け

一せ

深流のせ紅紫おもむ程はかゝ時白

一せ

ころ月まてうさうて了そう思ふ水は雪

一清

花は元川紅紫をとおそ一秋の草

一ぬ

雪乃花まきあふはぬまの風

一寸

一了念とおもひもあふを海と云は

一り

月いつ丹木の志々屋は雲の雪

一志



よもみししうすをますはまの智

一 厘

雲海ちて花丹ちりそへ下はみち

一 草

みけ嵐花る記まはま本立

一 連歌丹阿智在

まきの口の疵一大事の抽ちり口  
の智といつてまきくーまきあそつま  
あちこのまきあさ記きりりまきあせ  
是を能くは傳まへし

一 志やくし連歌と云

花ちりて風まう丹ちりまきり  
元紙まさらまのあひのこま



花ちよにもるき様々は入あひ  
るうと日物うまふよりて志ざし  
連款と中也 画この好ま也ゆめく  
其画うまて

一そひ車あといふ

こ乃うう海まれすむつき家は友  
つれもかれうあ一の一むら

是ハ上手此常丹阿んす家ぬ也  
やうのうう里成能うう管あは  
一ちうひ連款といふ

紅葉ふちるともを筆のたしまむ  
こ乃出そ風れ吹て人もな  
是ハ上手の長院の連款なり  
かやうの風格あう海月そいふ也



一き紀きりき欲と云

と我成多う好もんゆらきと云  
東海の花此まき美そそ友聖めて  
はたとき言振ハ富土也友野を富  
土をすそ聖比る也上<sup>毎</sup>句を丹冬  
こそハ前注る記や人子な聖  
とハ付たりはま上手の教

立の句たりいたらすしてハ申く  
満ちひら記まやかやうまの風持  
と教句たりあを句丹いさるまそ  
も句とに能くゆけ付へきあり

一教句集

去は去れ子せてふやの始のち  
多のめを我神のこ流此春日乾日



梅さくくと浅山ありのま古人  
 柳  
 君や花滞代志すまこそ女立られ  
 日  
 朝も紀丹浪あゆみ散れうもあはれ  
 日  
 梅の香丹うまきしさまは神代年  
 日  
 梅さくくと花より花よりつゆの朝  
 日  
 花と梅時を春より心あきり  
 日  
 う歌うくと雪をみり寸む々々  
 日  
 やうやし火の下草もある躑躅代  
 日  
 汲ああよ花ち海谷はまはれ  
 日  
 花を風あらし衣の朝の寸  
 日  
 おうて花かきききす袖のあき霞  
 日  
 初々々花をきききとりは衣更え  
 日  
 ぬぬぬは菅もえはるる岩根代  
 日  
 庭丹えむ山をあぬの八重梅  
 日



なれし陰花も忘れぬ文書式思  
まらひきぬ花や雲の袖の雪日  
香丹めくも丹玉ゆるき嵐式日  
去をう海詞の朧志都う那日  
閑寂や又一し月の去のま日  
神子々胡神白みせし夜う那日  
昨日も雪んし本を此去の朧日

お花を梅朧志しひくる丹かみ式日  
歎きの系月乃まや去れ朧日  
去と残く千世をこめくるや股う那日  
うす雲式夜山あひのすううも日  
風月をううに解れ花うう那日  
敷鳴れ乃志しあはは那う那日  
志うう海木を築えり此神のや那日



すゑはつへりしと橘の枝葉の那  
あゝしさを衣をぬる木陰の  
牡丹さへも葉を散らぬ蓮の  
川を流す水はすくなく又  
あひひんむ月あつる天の  
庭の毛をぬるあひぬる  
卯花の雪ははれ交の庭

庭せきくちりし葉お母の五月  
山あけき捨さんすくき  
又まへはとけ山むこつ  
急りし名家山風さうく  
すゝめとそ風もやと  
言ふ八卯を月の木  
とあたま木よいは



むきぬて丹秋哉まうする泉の形  
吹んそまの夜此未醒此淺草式  
日  
東ぬ秋をまう結くはうす記たもと式  
日  
木とや夜ひまは浅草をまはす式  
日  
下野や屯此名のり乃國法を  
日  
去る浪舟をま入約此尾を照哉  
柳  
沈舟の玉簾や月の鏡草  
日

むろふて丹少くはひての落葉式  
日  
菊もさき帯毒ををるをちをまを  
日  
香露るううお鏡を折れぬ小秋式  
日  
まうくひを秋の月此内院繩  
日  
杉秋をまをまを片とる山浜の形  
日  
ふてハちのまを秋をり乃下紅葉  
日  
月舟を船ち海ハかつたもみち式  
日



秋を引よめるをりぬや雲の風思  
るををあきて舟を浪よる尾花式 日  
下舟をもそめぬ紅葉のしづめせうね 日  
月をさし朝を秋志秋し急すね 日  
そめよ露木と此八月も暮る舟なり 日  
露の玉みしきまはくむま秋式 日  
月と秋をのちをけは舟ぬ光りね 日

心引月のま木ハ松もねし 日  
ちほ秋を待てまはく一葉のね 日  
まもらうく秋も枝の下すしん 日  
秋草は花しと木と此もとのま 日  
咲のほの露の下葉のまをねん 日  
顔むろし秋は子星や月の座 日  
まもあはにすしづめ露下紅葉 日



志流のちる風毛時ふ三秋のこゑ  
唯  
屯たふに葉ハちる雪ゆき此抄このの  
御  
時とき毎まいのこ天あまくくらりらり 神かみ在あり月つき  
日  
ままつ雪ゆき此この筆ふでより後のちや座まの屯とん  
日  
紅くわん系けいををもも花はな頭あたまもも黄わうやや去きのの雪ゆき  
冬ふゆののままつてて神かみのの様さまををらら月つきよりより耶や  
日  
目め初はつとと残のこくく雪ゆきののああしたした此この詠よみの  
日  
色いろああららににつつままああららのの初はつ志しくくまま  
日

神かみ在あり月つきむむへへ毛けささひひくくるるまま居いり  
日  
冬ふゆのの日ひをを時とき毎まいここををいいろろくく有あり  
日  
座ま母ははみみちちをを母はははは記しせせぬぬ源げん雪ゆき式しき  
日  
木き拈ねん此この人ひと行ゆき雪ゆき此この林はやしのの耶や  
日  
山やまやや雪ゆき雪ゆき此この端はた志しろろくく夕ゆふ時とき毎まい  
日  
ああららままちちるる汀つらちち此この玉たま簪かんざし式しき  
日  
おおししのの系けいににつつ海うみ毛けをを此この法はふ式しき  
日



すの此祿のるる冬もれり冬之氣  
所ありてや雪母んせらん松の年 日  
しらくも雪結る夜の夕月秋 日  
うけや及ひろま此雪此玉かした 日  
時ぬてハ指しらすに海峯ふ哉 日  
冬川ハ紅葉の舟のとほりの船 日  
冬草より秋くりにかへせむうら 日

雪あうらそ雪よなまへ座雪草 日  
雪や花時そま云杖のまてゆほ 日  
さうてたりる木ハ風のまゆみ 日  
菊ちみち冬まはふぬ山流の船 日  
まらつ雪ハ月よハありくうあた哉 日  
冬草よそてまうらあちの月ヨお葉哉 日  
七権を流り好ていへそお葉の船 日



あつすあまの笠よそい庭の雪は去宗  
一少人むとの事歎あまのよなきふあり  
ふゆもちふとやらんそる也雪月意  
ちんときりぬ魚さ西をそる庭の秀  
逸ちとをこをきんとくすむる取成さ  
のこ付すとも何をほそくちをく

托玄よお魚——百歌丹五六句おとそ  
七句八句まを子細ち——いっ丹をさ  
るりあつくハサ入のつはいつるあふも  
あつ紀申丹ころきゆのま——あや  
又名取ちんとあはぬまきあちんと付  
つてまをそえちつちつ付いっも  
ろ——そえあはつとそあ人ちんとの



方よそあかろりよめとあしるハきく  
あくしきりあ合られハとてこを  
ものもあんとハあつ然れやうの  
ハあすそくすのくと何ちそくい  
くもやこくやす無しし多とハ  
うはくくきんとそり心ねく  
畧のやうなる子思女ほとのちひ  
くもこりくしやうの取ハ作志  
のあす多とくしやうの残を連  
飲の用心とハ中も也

右此本從尚運師備之令他寫之者也

明和七戌戌仲秋下旬 金資真舜澄心性



隨為熟筆依此亦印本寫中若也  
若去後見之則美之如一就喜也嗚呼  
人間為之者嗚呼歎式志筆法畫三  
天文十四十二月中旬

右以內閣文庫本影寫校合畢  
昭和七壬申林鐘下旬















